

# 技術士の目

いわてを見る

第10回

## 閑話休題～これからも盛岡・岩手の地で～

出口清悦（建設部門、総合技術監理部門）

これまでに掲載された先輩諸兄の投稿を拝見しました。いずれも技術を極め尽した内容に満ち溢れています。しかし混迷の深い時代のさなかにおいて、今の私にはとてもそのような的確な提言は無理だなどと思いました。一方技術の領域から少し間をおいた技術士の目線からなら何とか描けそうな気がしました。この連載のテーマの副題が「いわてを見る」となっています。これまでの自分を取り巻く盛岡や岩手との関わりなどについて、今一度「いわてを見る」ことならできるかも知れないと思い、恥を忍びつつ筆をとりました。

私は隣県秋田から盛岡に移り住み、すでに50年以上になります。凍てつく冬の厳しさ、見渡すと市内を取り巻く丘陵の杜々、豆腐や納豆などの穀物類の豊かさ、語尾のゆるやかな盛岡のことば。日本海の文化・地勢・風土に慣れ親しんで育った私にとっては、ここ盛岡の毎日のくらしすべてがとまどうことばかりの連続でした。秋田市からわずか100km余りしか離れていないのに、これはいったいどうしたことか。今思うに、盛岡の自然、食べ物、話すことばなど、そのあまりの違いに愕然としたものです。

盛岡の職場で働き始めた頃です。滝沢生まれの運転手さんのことばです。「おめはん、アギダの生まれだってナア、フーン？」。その時はこの問かけの意味がよく分かりませんでした。入社当時県南の100万坪の工業団地開発に携わっていました。地域開発では、細かい技術を習得することよりその地の心情を汲み取ることが格段に難しいと肌で感じていた頃です。

一方、肝心の盛岡や岩手の事象がさっぱり分かりません。運転手さんのことばには、何となく秋田生まれの人間への不信感が感じられました。それは、

戊辰戦争終期に、久保田（秋田）藩が奥羽越列藩同盟から突如離脱したことが許せないという趣旨のようでした。しかし私は戊辰戦争ということばさえ知りませんでした。たった100年程前の南部藩が辿った激動の歴史さえ当時は全く理解していなかったのです。これでは駄目だ、この地でお世話になる以上は、岩手のことを理解し尽そう。そう心に決め盛岡や岩手捜しの旅が始まりました。

檀山佐渡を手始めに、那珂梧楼、東次郎、金田一京助、啄木、胡堂、賢治、鹿島精一、鈴木舎定、新渡戸稲造、原敬、米内光政など手当たり次第の模索でした。同時に盛岡城跡、内丸、本町、肴町、紺屋町、八幡、北山、上田、仁王小路、紺屋町、中津川界限など休日のたびにさ迷いました。盛岡のやわらかさが身に沁みました。水沢や一関、三陸にも脚を伸ばし、高野長英、斉藤実、後藤新平、大槻文彦、藤原氏三代、三浦命助などの偉業にも触れた後、歴史のみならず、岩手に関するあらゆる分野の書籍蒐集を心に誓いました。

岩手の風土、文化、くらし、地勢、人物、美術、文学など、今では岩手に関わる書籍だけで4000冊ほどはあるでしょうか。部屋の床が抜け落ちそうで足の踏み場もありません。想うに、技術領域を超えたこれらのことが、盛岡や岩手で暮らしていくうえでどんなに私に勇気や啓示を与えてくれたことか。ただただありがたく感謝するのみです。

さて次代を担う岩手の技術者たちよ。依頼どおりの仕事をする事なかれ。AIが苦手とする柔軟な創造的思考へ挑戦せよ。技術の研鑽に加え、岩手の風土、歴史、文化、倫理、文学など幅広い分野を探索し、幸せて豊かな岩手を築いてほしい。これが私の願いです。